

平成 30 年度カワウの保護及び管理に関する検討会 議事概要

日時:平成 31 年 1 月 22 日(火)13:30～17:00

場所:市民活動センタープラッツ6階 第3会議室

1. 開会 挨拶 西山理行（環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室長）

2. 出席者紹介

委員	加藤洋	野生動物保護管理事務所	
	亀田佳代子	滋賀県立琵琶湖博物館	
	須藤明子	イーグレット・オフィス	
	坪井潤一	中央水産研究所	
	羽山伸一	日本獣医生命科学大学	(欠席)
	山本麻希	長岡技術科学大学	
水産庁	鈴木信一	栽培養殖課	
環境省	西山理行	鳥獣保護管理室	
	野川裕史		
	鎌田憲太郎		
	近藤千尋		
事務局	高木憲太郎	バードリサーチ	
	加藤ななえ		
	熊田那央		

3. 議事

- (1)カワウの生息状況・捕獲状況・特定計画の策定状況について
- (2)複数県の連携によるカワウの広域管理について
 - 1)複数県の連携によるカワウの広域管理について
 - 2)中国四国カワウ広域協議会で開催された勉強会について
 - 3)カワウの季節移動と個体数調整の影響・効果について
- (3)カワウの保護及び管理に関するレポートについて
- (4)その他

4. 議事概要

(1)カワウの生息状況・捕獲状況・特定計画の策定状況について

営巣数の調査が普及すれば、個体数だけよりも、カワウの生息状況がより詳しくわかるようになる。しかし、調査には困難があり、調査方法の統一にも課題がある。

検討委員からは、営巣数のデータを活かしていくべきとの方針が示された一方、それができるようにしていく上での課題が多数出された。

個体数調整を実施する場合は、コロニーの営巣数を事前事後で調査を行ない、個体数調整のインパクトを評価できるようにすることが重要だとの指摘が出された。事前の営巣数によって、捕獲数が同じでもインパクトの大きさは異なる、とのことだった。

また、個体数調整や繁殖抑制を実施する際に、分布管理が重要になるが、その理解がまだ十分広がっていない点が課題として指摘された。理解の浸透にあたり、3段階の空間スケール(ねぐら、水系、県)の考え方が重要との意見が出された。

都道府県行政における担当者の異動が、管理計画の運用や、継続的な事業の実施において、マイナスの影響を与えている課題について議論された。担当者が変わっても影響が出ないようにするための方法について、財務担当向けの説明資料を作っておくなど、いくつか意見が出されたが、議論が深まるには至らなかった。

(2) 複数県の連携によるカワウの広域管理について

1) 複数県の連携によるカワウの広域管理について

モニタリング調査の継続ができない都道府県が出てきている状況について、議論された。哺乳類と個体数調査の考え方が違う点、鳥獣だけではなく水産担当課も関わっている点、モニタリングが効果的な対策を続ける上で不可欠なことが理解されていない点、などの課題が出され、整理された。カワウも哺乳類と同じ方法で推定することは可能だが、カワウは直接個体数を調査することが簡単で早くコストも高くはないこと、推定はどんなに分析技術が上がっても実測値との精度の違いは大きいことなど、データが得られなくなれば管理方針の立案にも影響が出ることなど、個体数調査を続けるべきだとの意見が出された。ただし、課題の解決に直接つながる有効な打開策は議論の中からは生まれなかった。

広域連携による具体的な管理は十分実施されていないという課題について、講演会の削減のほか、都府県からの報告についてフォーマット化を図り、情報共有は紙面上で済ませることで、議論の時間を確保するという意見が出された。具体的な対策などを議論するには、水系単位で集まる水系会議が良いだろうとの意見が大勢を占めた。広域協議会では、時間削減でできた時間で、水系ごとの報告に時間をかけると良いとの提案があった。水系単位で集まるには、横並びの関係では立ち上げにくく、国や広域協議会などが音頭をとるべきだとの意見も出された。水系会議のモデルとしては、中国四国カワウ広域協議会の中海部会の例が紹介されたが、漁協を加えた作戦を立てる実務者会議の趣きが強いとのことだった。

2) 中国四国カワウ広域協議会で開催された勉強会について

県の担当者の異動によって、経験の浅い担当者が多くなると、広域的な管理のビジョンや、個体群管理など掘り下げた議論はできなくなる課題が共有された。しかし、そうだとすると、一方的に話を聞く講演会とは違い、ワークショップのような形をとることで、行政担当者が必要としている情報を専門家側も理解しやすく、的確な助言をすることができて、行政担当者の満足度は高いため、有意義であったとの意見が多数だった。

時間を長く取っても議論を深められるわけではなく、漁業者などを入れることも一つの解決方法として提示された。水系会議をデモンストレーションとして開いてはどうか、という提案もあった。

広域協議会でビジョンをしっかりと作ることが大事だとの意見が出された。そのためには、都道府県でビジョンが作られる必要があり、それを誘導するためのアイデアがいくつか出された。情報共有は事前に済ませておき、勉強会では、参加都府県から自県の状況の説明や県としてのビジョンを説明してもらうのが良いとのことだった。また、被害を受ける魚に焦点を当てて、地図を作成して、場所や季節ごとに被害を減らすための目標設定をしていくことの重要性が指摘されたほか、個体数目標を決めることが動力源になるとの指摘も出された。水系会議のような具体的な作戦会議には利害関係者を入れることが大事だが、様々な意見に振り回されない核となる考え方や戦略を共有する場として広域協議会の勉強会は位置付け、そこで整理された内容を水系会議に伝えていく体制が良いとの提案が出された。

近年の研修会は計画づくりに重点を置いた内容にしているが、計画を作った後の運用に課題が移ってきているとの指摘があった。基礎について、新しく担当になった人には、初日でしっかり学んでもらい、翌日からワークショップで計画の運用の仕方について研修できると良いとの意見があった。計画の作成段階でどう役割分担を決めるのかということ、また、その後の運用の事例を見せることができると良いのではないかと、という意見が出された。

3) カワウの季節移動と個体数調整の影響・効果について

ねぐら・コロニーで調査されているカワウの生息数を水系単位で集計した結果、カワウの移動や、琵琶湖での個体数調整の影響や効果の範囲が明らかになったが、データから読み取った内容については、専門家に違和感なく受け入れられた。また、改めて、モニタリングの重要性が示されたと評価された。広域での全体的な傾向については、カワウの生態に詳しくない行政担当者にも理解しやすいように、情報量を絞った図と短い説明とでポイントを解説した資料を作ったり、広域協議会で解説すると良いという提案が出された。一方で、水系単位などのカワウの動向については、図の提示のみに留めて、勉強会などで、各自に考えさせると良いということだった。

(3) カワウの保護及び管理に関するレポートについて

レポートの内容については、中海部会の設立の経緯や考え方、体制などについて紹介してはどうか、という意見が出された。また、河川環境を整えていくことや河川管理者にカワウの管理に関わってもらうことが大事だとの意見が出され、将来的にそうした内容を掲載できるようにしてはどうかとの意見が出された。